

たのです。

一番有名なのは、藤田嗣治です。『画家たちの「戦争」』という本があります。戦争画がたくさん描かれました。知識人は戦争に何らかの形で協力しました。永井荷風みたいに沈黙した人もいますが、この時期、仕事をしない覚悟をしない限り、すべて戦争協力になっていったわけです。画家も、陸軍と海軍から依頼されて現地に行き、たくさん絵を描きました。ある人に言わせると、藤田の最高傑作はこの戦争画だと。[スクリーンに画集から映写] これは『アツツ島玉砕』。これが最初の玉砕で、戦死・玉砕がこの後に美化、英雄化されていくのですが、そういう中で「国民総力決戦美術展」という展覧会に出品された絵です。すごく描き込んである濃密な絵だと思います。これは『サイパン島同胞臣節を完うす』。軍人でない人も含めて、自決・玉砕していった、それを描いています。これは『哈爾哈河畔之戦闘』。モンゴルと満州の国境あたりのところで起きたノモンハン事件を描いている絵です。[『南昌飛行場焼打』、『神兵の救出到る』、『シンガポール最後の日』を投影]戦争初期の段階の絵です。戦争画は東京国立近代美術館で絶えず何点かは展示されていると思います。また最近、いろいろなところで戦争画を振り返る機運がありますが、この戦争画をどう考えたらいいのでしょうか。

戦後に芸術家や文化人の戦争協力責任ということが言われました。藤田は、1945年10月25日の朝日新聞に「画家の良心」という文章を書いて、批判に答えてこう言っています。「元来画家と云うものは真の自由愛好者であって軍国主義者であろうはずはない。たまたま開戦の大詔喚発せられるや一億国民は悉く戦争に協力し、画家の多数の者も共に国民的義務を遂行したに過ぎない」と。戦争責任と言われても困るという話ですね。これは多くの人たちの反応だと思います。

芸術作品を見るときに、私みたいに社会科学の側の人間が注意しなければいけないのは、政治的メッセージに惑わされて芸術作品としての完成度を見誤ってはいけないということです。両者は別物で、私はどんな場合でもあくまで芸術作品としての質を重視したいんです。藤田の戦争画がもし芸術作品として最高傑作だとしたら、芸術家にとって戦争という経験が一番芸術家的能力を引き出すような状況だったのか。その状況が一番芸術家としての能力を発揮したのかと。芸術家の芸術家としての能力を引き出す状況というかモーメントみたいなもの、戦争がそうだとしたら、それは我々がコントロールし得るのか。今後、もう少し客観的に突き放して、戦争画の再評価というのが行われてくるのではないかと私は思っています。

次は音楽です。戸ノ下達也さんという研究者がいます。この人はある鉄道会社の社員ですが、十五年戦争における音楽の利用のされ方、動員についての研究の第一人者です。美術に関しては、戦争画というのがあって、戦争画の展覧会が日本中で開かれましたが、同じようなことが

音楽でもありました。日本音楽文化協会という組織があり、十五年戦争の時期にはあらゆるものが統制され、一元化されていきました。ここに大東亜戦争1周年記念、戦場精神高揚大音楽会、日比谷公会堂、というものがあります。[『音楽を動員せよ：統制と娯楽の十五年戦争』から写真を映写]。当時、音楽挺身隊という組織がありました。これは慰問に行くのだと思いますけど、その隊長が作曲家、山田耕筰です。山田耕筰も戦後に責任の議論になりましたが、あまり生産的な議論にはなっていないのは、音楽の世界も同じです。

文学者については、日本文学報国会というものがありました。文学者はほとんど全員入っていた組織で、岩波茂雄も入っています。詩の部会の会長が高村光太郎で、『12月8日』という有名な詩があります。「記憶せよ、12月8日。この日世界の歴史あらたまる。アングロサクソンの主権、この日東亜の陸と海とに否定さる。(中略)老若男女みな兵なり。大敵非をさとるに至るまで我らは戦ふ。世界の歴史を両断する。12月8日を記憶せよ。」* 一部を(中略)としました。

これに対して、だから責任があると単純に言えるのかどうか。仕事を辞める覚悟がない限り、結局総力戦体制の中に巻き込まれていくので、芸術家はみんな、こうなっていくわけです。それは芸術家にパワーがあるからです。芸術家の持っている表現力には世論形成力があるから、それがよくも悪くも利用される。それは逆手に取ることもできるわけで、戦争をする方向ではない方向で芸術家の持っているパワーを発揮し得ると思います。

今、集英社から『戦争×文学』という全集が出ていますが、これは1964年から1965年にかけて出た『昭和戦争文学全集 全15巻』の新しいバージョンです。十五年戦争の最初から最後まで文学作品を集めています。戦争中作家が何をやっていたかよく分かります。芸術家の戦争協力の責任について考えるということは、これから戦争を防ぐために、また平和をつくるために、芸術家の持っているパワーをどのように使うべきか考える、ということだと思います。

亡命した芸術家／亡命しなかった芸術家

ヨーロッパでは、20世紀の歴史の中で亡命という現象がかなり見られました。1つのピークはナチス・ドイツです。ヒトラーが政権を取ったところで、ユダヤ人に対する差別、虐殺を行いましたから、逃げられるユダヤ人は逃げました。アメリカ合衆国に亡命した人が多いと思います。もう1つ、亡命した芸術家が多かったのがソ連です。音楽家、バレエダンサー、作家等々。今のサンクトペテルブルクは、昔レニングラードという名前でしたが、そこに当時キーロフ・バレエという名前のバレエ団があって、ロシアのバレエの最高峰でした。そこにいた人は次々と亡命しました。パリシニコフという男性のダンサーや、ナタリア・マカロワと

※吉野孝雄『文学報国会の時代』より

出典

司修『戦争と美術』(岩波新書、1992年)
神坂次郎・福富太郎・河田明久・丹尾安典『画家たちの「戦争」』(新潮社、2010年)
野見山皖治・橋秀文・窪島誠一郎『戦争が生んだ絵、奪った絵』(新潮社、2010年)
『松本峻介 新潮日本美術文庫45』(新潮社、1996年)
戸ノ下達也『音楽を動員せよ——統制と娯楽の十五年戦争』(青弓社、2008年)
戸ノ下達也／長木誠司編著『総力戦と音楽文化——音と声の戦争』(青弓社、2008年)
明石政紀『第三帝国と音楽』(水声社、1995年)
長木誠司『第三帝国と音楽家たち』(音楽之友社、1998年)
皇紀2600年祝賀音楽
吉野孝雄『文学報国会の時代』(河出書房新社、2008年)
『昭和戦争文学全集 全15巻+別巻』(集英社、1964-65年)